ノーモア・ヒバクシャ通信別冊

発行　２０１８年１０月４日

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.kiokuisan.jp/
継承ﾌﾞﾛｸﾞ　http://keishoblog.com/
ﾌｪｲｽﾌﾞｯｸ　https://www.facebook.com/kiokuisan
ﾂｲｯﾀｰ　https://twitter.com/nomorehibakusha

発行者
NPO 法人　ﾉｰﾓｱ･ﾋﾊﾞｸｼｬ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
TEL/Fax　03-5216-7757（直通）
Email　hironaga8689@gmail.com
郵便振替口座　00110-5-292881
口座名義 ﾉｰﾓｱ･ﾋﾊﾞｸｼｬ記憶遺産を継承する会

継承する会では、「継承活動に取り組み人々をつばぐプロジェクト」で、全国各地で継承活動に取り組む方々を取材し、「継承ブログ」など継承する会の Web サイトや「ノーモア・ヒバクシャ通信」に掲載してきました。

ボランティアのみなさんのレポートは好評ですが、取材が集中すると「ノーモア・ヒバクシャ通信」のページ数が多くなって印刷・発送作業の負担が大きくなってしまいます。

２０１７年８月発行の「ノーモア・ヒバクシャ通信３６号」までは「継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクト」のボランティア・ライターの皆さんの取材レポートを「ノーモア・ヒバクシャ通信」に掲載してきましたが、この度、「ノーモア・ヒバクシャ通信」の別冊として「継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクト」のレポートをお届けさせていただくことにしました。

また、このプロジェクトにご協力いただけるボランティア・ライターの方を募集しています。関心のある方は継承する会のＨＰに募集要項を掲載していますのでご覧ください。

★もくじ

１．（東京）2017/2/18(土) 被爆者と区民の交流セミナーを取材して　Ｐ　２
～「71 年を超えてヒロシマ・ナガサキから」～
２．（静岡）2017/2/27(月) 被爆 2 世・3 世交流会を取材して　Ｐ　６
～「原爆を引き継いでゆく方法」～
３．（東京）2017/7/17（月）江戸川区原爆犠牲者追悼式　Ｐ　８
～東京の地で築く平和～
４．伝承者・沖西慶子さん　“人から人へ”継ぐ思い　Ｐ１３
５．2017.8「証言のつどい」を取材して　Ｐ１６
～生の言葉で知る“原爆”～
６．（東京）2018/1 国境を越え考える平和　Ｐ１７
～なぜ、ヒバクシャを語り継ぐのか～
６．（東京）2018/5　家族写真が伝える“平和”　Ｐ１９
～カメラマン・堂畝紘子さんに聞く～
７．（仙台）2018/8　43 回目の「仙台平和七夕」　Ｐ２２
～夏の風物詩の片隅で～
８．（東京）2018/9/18　被爆の実相とデジタルアーカイブ体験会　Ｐ２３
～新たな継承体験～

１．（東京）2017/2/18(土）被爆者と区民の交流セミナーを取材して
～「71 年を超えてヒロシマ・ナガサキから」～

こんにちは、つなぐ PJ のしのです！
今回は杉並光友会主催の被爆者と区民の交流セミナーを取材しました。題して「71 年を超えてヒロシマ・ナガサキから」。13 歳の時に被爆を体験した立野さん、そして原爆の受けた祖母を持つ被爆 3 世の岡山さん。大きく世代の離れた 2 人が原爆に持つ視点は一体どんなものなのでしょう…?

《第 28 回被爆者と区民の交流セミナー　ヒロシマ・ナガサキから 70 年を越えて》

開催日：平成 29 年 2 月 18 日（土曜日）開催時間：午後 1 時 30 分から午後 4 時まで（開場時間　午後 1 時）開催場所：高円寺障害者交流館
被爆証言　立野季子　演題「未来を生きる皆様へ」講演　岡山史興　演題「三世が被爆体験を継承する」

■原田会長挨拶
「杉並にいた被爆者は 700 人を超えていましたが今では 300 を切りました。私自身も 81 歳になりました。」と挨拶をされ、被爆証言をされる立野さんへマイクを譲りました。

■被爆証言　立野季子　演題「未来を生きる皆様へ」

「私は当時 13 歳、長崎で被爆しました。日本舞踊のお師匠として活動し、長崎のおくんち祭で踊っています。ゲストティチャーとして学校訪問したときはシャカシャカと鉛筆の走る音が印象深い。子どもの未来につないでいくという言葉に安心する。」
と軽い前置きをして被爆証言が始まりました。

小学校 3 年で大東亜戦争開始。長崎にも空襲が始まりました。
終戦の年、私は女学生 1 年生でした。寝るときも着の身着のままなのは、すぐ逃げられるようにです。
8 月 9 日当日、いつもより空襲警報が早く解除されました。

外に出て空き地に防空壕を掘り始めた時にピカッ。熱風で壕内に吹き飛ばされ気絶しました。
中華屋のおじさんが「立野に爆弾が落ちた！」と立野さんに伝え家にいた全員が死んだと思って、その瞬間孤児になったと思い「うちば捨てんでえ」と泣きじゃくりました。
高尾病院の防空壕に行ってみると家族がいて涙が溢れ出しました。しかし家は大きく傾いていて、大事なもの大切なものは何一つ持ち出せず火に追われて逃げました。家は焼け落ち、怒り、悔しさから一家で泣いたことを覚えています。

「飯を取りに来–い」
被爆してすぐ、メガホンで叫ぶ声が聞こえます。
イチジクの葉で包んだおにぎりが支給されましたが私は熱風で火傷していて食べられなかった。

トタンや焼けたもので風雨をしのげる掘っ建て小屋を作ってそこで暮らし始めました。川辺でそこに水道があったから。
すぐに河原で人を荼毘に伏すようになりました。腐臭、人を焼く臭いは想像を絶します。

夜になると川辺に遺体を持ってきて焼くんです。
「〇〇ちゃん、〇〇ちゃん」と呼ぶ声。
朝になるとお茶缶か何かにカランカランと骨を入れる音がまた恐怖感を煽ります。毎日恐怖が身に染みるようでした。
蛆を落とす人、運ばれる死体、毎日悲惨な光景が目の前で繰り広げられますが、それでも生きていなければならなかったのです。

6 日後、玉音放送を聞きました。
憲兵の中には「まだ戦争は終わってないぞ」とメガホンで叫びながら走っていく人もありました。

戦争は終わっても状況は終わっていません。傷ついてジリジリと死を待つ人々はまだ野晒しにされていました。

長崎から三重に疎開しました。その道中にも苦しみながら死んんでいった人々がいます。
疎開先でもその後、指先に集中してイボが泡が重なるようにできました。死臭がいつまでも残るようで、毎日ゴシゴシ身体を洗いました。

原爆の被害は娘にも及びました。
「被爆者の娘に息子はやれません」と結婚を断られたんです。
受けた被爆は消せません。

こんなことが２度とないように願います。

…ここまで話して立野さんはマイクを置きました。最初のうちは淡々と話していた被爆証言でしたが、娘さんの話では涙を浮かべ非常に辛そうでした。きっと立野さんにとっての理不尽な罪悪感が彼女を苦しめ続けているのでしょう。

ちょうど休憩になったので立野さんにお話を伺いました。
――娘さんのことを教えてください。
娘が黙って二階に上がって、後を追うと泣いているんです。
しばらく口を開かなかったけど、聞いてみると結婚を断られたって泣いてた。私も床に頭を擦り付けて謝った。
「ママのせいじゃないよ」と娘は言ってくれるけど申し訳なかった。

当時は被爆の毒が人に移る、奇形児が生まれると風評があったためにこんな悲劇も多くありました。これも私たちが知っておくべきことの１つだと思います。

■講演　岡山史興　演題「三世が被爆体験を継承する」

私は被爆３世、祖母が長崎の被爆者です。
高校生のころから原爆に関わる活動を始めました

＊高校生署名１万人活動→高校生の声を国連に届ける活動。１年目に、高校生・大人併せて３万人を達成。

＊知らないことの意味
ある時街頭で署名運動をしているとある被爆者が「意味ないから。そもそも被爆してない君に何がわかる。」という言葉を投げました。その言葉に傷ついた当時のメンバーもいます。青臭いとか、知らないくせに、理想だ、なんて批判もありました。
でも､僕は同じように祖母の顔を知りません｡私の祖母は生まれる２年前に亡くなって、命日と父の誕生日が一緒です。そんな父は誕生日を祝わない理由を知ったのは、平和活動を始めた後でした。それは、知らないことにも意味があることを考えさせられるきっかけになりました。

＊３つの転機

−ネバダでの出会い
核実験場｡2003 年３月イラク戦争が始まるタイミング。
現地の核実験被害者の方とのと会話で、核実験を実施するタイミングについて聞いたことが強く心に残っています。
現地の方の話によると、核実験が行われると

き政府は
「今日は外で花火が上がるから見るといいよ」
「砂漠なのに雪が降るよ」
などと言い、住民が放射能を浴びやすい環境をつくって、影響を調査しようとしていたのだといいます。さらに金持ちが住むラスベガスに風が吹いているときは実験を行わず、貧しいユタに風が吹いているときにするのだ、とも。
　事実でないことも含まれているのかもしれません。しかし、このときの話は、核の問題は広島・長崎だけではないというショックを私に与えました。。

–シンガポールでの出会い
　19 歳のとき、日本の若手活動家の代表としてピースボートに乗ったときの話です。
「原爆は落ちてよかった。日本軍がここで何をしたか知っているのか？母親から赤子を取り上げ銃剣で突き刺すような遊びをしていた。」
　現地の人にそんな話を聞き、日本人がやってきたことも考える必要があると知りました。

–つくばでの出会い
　そんな活動の話を大学で進学したつくばの友人にすると、「何かすごいね」って反応が返ってくる。つまりは他人事でした。
　バックグラウンドが異なっても伝わる平和活動を、ということから「アイラブキャンペーン」を実施しました。
　大切なものがあることが平和の一歩。失われて困るものがあることに気づいてもらうことから始めることにしました。

＊社会人になってから
　平和を上手に伝えている人が少ない。というところから PR 会社に就職して、2 年後、ナガサキ・アーカイブを始めました。それは現在取り組んでいる、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」の活動にもつながっています。

＊平和が仕事になる時代
　このパートで岡山さんはこんな話をしていました。
・オリジナルなものに価値がある
・今の時代に最適な形で世の中に届けていくことが必要とされている
・クラウドファンディング、NPO…人の支援さえあれば仕事になる。2014 年、会社を立ち上げました。
　最終的には平和という言葉を使わなくても適切な判断ができていくような時代にしていきたいです。

■質疑応答

Q. 平和が仕事になるとは？
A. 岡山：クラウドファンディングで 170 万集めた。それは活動の価値に対するの対価。

Q. 差別について（視覚障がい者の方から）。
A. 立野：10 本の指にイボができた。三重で「鬼娘」と呼ばれていた。娘が 2 人とも結婚しないで 50 代になっている。
岡山：そう言った意味では若い人の方が物知りです。上の世代の人は古い刷り込みがありますが、今の時代は情報がフラットに入ってくるから。

Q. 平和とは？
A. 立野：核のない時代。平和は本当に脆いものです。戦争は絶対にしてはいけない。女子供が我慢するんです。
岡山：理不尽のないことです。

被爆者の立野さんは娘さん 2 人と一緒に苦しんだ足跡を一所懸命語っていただいたことに感謝します。そして岡山さんは同じ 3 世として非常に新しい切り口を持っていると目から鱗な情報が目白押しでした。こういった若い力が人々の記憶を伝え、必要なところへ届くように時代に合った形で発展することに力を入れたいと改めて考えさせられました。

しの（継承活動に取り組み人々をつなぐプロジェクト）

２．（静岡）2017/2/27(月）被爆 2 世・3 世交流会を取材して
～「原爆を引き継いでゆく方法」～

こんにちは、つなぐ PJ のしのです！
今回は東京から少し足を伸ばし静岡県静岡市に行ってきました。

皆さんは 1954 年 3 月 1 日にマーシャル諸島ビキニ環礁沖で起こった第五福竜丸事件をご存知でしょうか？ アメリカの水爆実験により日本の延縄漁船、第五福竜丸の乗組員 23 人が被曝した痛ましい事件です。

（参考：都立第五福竜丸展示館 http://d5f.org/about.html ）

これをきっかけに3月1日をビキニデーとし、静岡県焼津市で原水爆禁止を訴える集会がはじまりました。今回の「被爆2世・3世交流会」はビキニデーに合わせて静岡県在住の磯部典子さんが企画した集会です。

■自己紹介

今回は私を含め6都道府県、8名が参加しました。参加者は全員親族に被爆者を持ち私が3世、後の方は全員2世です。偶然ですが参加者の家族の被爆地は全員広島でした。

原爆や反核に興味を持ち始めるきっかけはやはり親族の不安を間近で見てきたというのが大多数です。ずっと白血球の数を気にしていたり、一生消えないやけどを抱えていたり、幼くして原爆症で親を亡くしたり…

■何を伝えたい？

小林さん：原発を作る時40年以上前、国家予算が1兆7000億の時に被害予想額3兆、それを国家は隠していました。肥田先生は「原発は電気を起こすために作ったんじゃなく、プルトニウムを作るために作ってついでにできた電気を使うことにしたんです。」と語っています。日本は原発を海外に輸出して儲けたいんです。でも最終的なところは核兵器は作りたいんです。士農商が儲かるでしょ？

磯部さん：原爆で長崎では7万人、広島では14万人の命を奪った、その事実を知ってもらいたいと思います。被爆した父の入院した1945年9月6日，ファーレル将軍が「広島・長崎では、死ぬべき者は死んでしまい、9月上旬現在において、原爆放射能で苦しんでいる者は皆無だ」という声明を発表して放射能被害の隠蔽が始まったことも伝えたいです。

■原爆絵本の読み聞かせ活動

次世代へ原爆のことを伝えてゆく手段として磯部さんは活動的に読み聞かせ活動を行っています。今回はその中の一冊を朗読され参加者の感想を聞きます。

四ツ谷さん：学校の読み聞かせで伝えたい。朝読書の時間にやっているが学校司書を各学校に置いて欲しいと思います。

原さん：聞かせてもらって辛い。でもその事実を形として伝えていくことが大切です。

馬場さん：日常を生活していた人の人生を狂わしていくこと。学校の平和教育や広島への修学旅行も減らされているという現状、こういう事実に気づいた大人が伝えていくことは重要だと思います。

米重さん：絵本で伝えていくのはいい。原発事故の関連はわかりやすいですね。

小林さん：広島・長崎と今回の福島の関連が意図的に隠されて来た背景があるけど、これを明らかにしていく必要がある。わかったものが言う責任があると思います。

時田さん：自分の親父が被爆者ってわかって身近な問題として考えるようになったけど、もし身近に関係者がいなければこんなに考えることもなかったと思う。絵本、『ちいちゃんのかげおくり』、『はだしのゲン』のように絵で訴えるのは良いと思う。心に染み渡るから。

全員の意見を出し合い、絶対に核兵器を許してはいけないという磯部さんのはっきりした言葉で会は締めくくられました。

余談ですがこの日はご好意で四ツ谷さんのお家へ泊めていただき、翌日彼女が定期的に行なっている中学校への読み聞かせ活動にも同行させていただきました。選んだ本は昨日磯辺さんが会で読んだ「ヒロシマの少年じろうちゃん」、訪れたのは地元の中学校です。

中学生たちは四ツ谷さんの語りが始まると身動きもせず聞いていました。目も耳も凝らして四ツ谷さんの言葉一つ一つが彼らの中に染み込んでいるように見えました。

「ここから何かを感じ取ってもらえたら嬉しい。」

四ツ谷さんはそう語っていました。

しの（継承活動に取り組む人々をつなぐＰＪ）

３．（東京）2017/7/17（月）江戸川区原爆犠牲者追悼式 ―東京の地で築く平和―

7 月 17 日、葛西区民館ホールで「江戸川区原爆犠牲者追悼式」が開催された。今年で 37 回目となるこの追悼式には、例年、区内外の被爆者はもちろん一般市民も多数参加しているという。

この日も開場の時間になると、続々と参加者がやってきた。しかも世代が幅広い。子供と一緒に来ている方や、千羽鶴を持った生徒たちの姿も見受けられた。

ロビーには被爆直後の広島・長崎の様子を伝える写真の展示。また、折り紙が置いてあ

るスペースがあり、参加者が歓談しながら鶴を折っていた。江戸川区在住の被爆者で成る「親江会」がデザインした折り紙で折った鶴で、千羽鶴を作り献納するのだそうだ。

約 200 名の人でホールが埋まる中、追悼式が始まった。

1. 開会あいさつ：江戸川区原爆被害者の会（親江会）会長 奥田豊治さん

今年 87 歳になる奥田さんは、中学 4 年生の時に広島で入市被爆した。「1 つお願いがあります。」と参加者に訴えた。
「私ども、広島・長崎の被爆者も 17 万 4 千人になりました。もう半分以下です。平均年齢も 80 歳を超えました。そこで私ども被爆者が最後のお願いとして、核兵器廃絶国際署名を始めました。追悼碑を作った時にもう一度立ち返って、被爆者だけではない、大勢の皆さまとこの署名を進めていきたい。核兵器はなければ使いません。私たちが広島・長崎で、実際に味わった、見た、臭ったあのようなことを、再び世界中のどこにも起こしてはならないし、自分たちの孫にも、ひ孫にも味あわせたくない。そのためには、核兵器をなくすということしかない。あれば誰かが使います。核を持つ、アメリカやロシアといった国々にも訴え、本当の意味での核のない世界を作り上げたいと思っていますので、この署名にぜひご賛同いただければと思います。私たちの気持ちを次の世代に伝えていきたいと思っております。」

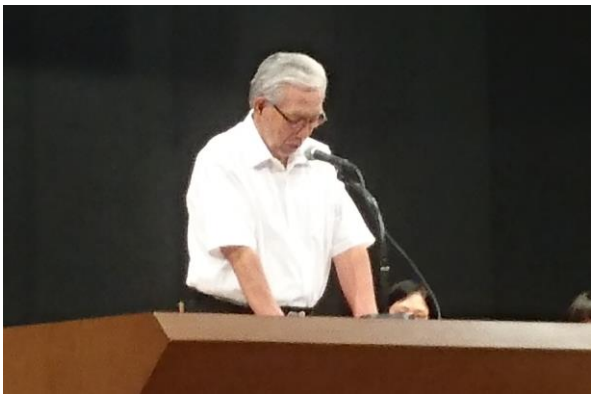
2. 犠牲者名簿奉安
3. 黙祷
4. 挨拶
江戸川区長 多田正見氏

江戸川区議会議長 藤澤進一氏
広島市長 松井一實氏（代読）
長崎市長 田上富久氏（代読）
東友会理事 湊武氏
5. 千羽鶴献納名簿発表
6. 被爆体験発表

■山本宏さん（小学２年生の時に広島で被爆）

1945 年 8 月 6 日、その日もいつもと変わらないのどかな朝だったという。ただ朝から警戒警報のサイレンが鳴ったため、学校に行くかどうか、同じ班の者と相談していた。その時、ピカッと閃光が走った。8 時 15 分、広島に原爆が投下されたのだ。

「閃光に目をやられたからか、数秒後には世の中真っ暗になっていました。何があったのだ。さっき警戒警報が鳴っていたからか。だが道路や近所の家の様子が違う。朝なのに、ほこり・煙で夜のようだ。」



突然の辺りの変化に恐怖を覚えながらも、家族のことが気になった宏さんは自宅に向かった。広島市己斐町にあった自宅は、爆風で見る影もなくなっていた。

「母がいた。倒れた水屋の陰の斜めの隙間から、授乳中だったらしく乳飲み子の弟を抱え這い出てきた。顔が血まみれだ。妹が帰ってきた。友達の家に行っていたが、大きな怪我はない。祖父や祖母は家の家具の下敷きになっていた。皆でひっぱり出しました。全員血まみれでした。」

家にいた家族を助け出し、一家は自宅近くの防空壕へ避難する。その道中で宏さんは市内から逃げてくる人々を目にした。

「防空壕へ避難する途中、逃れてくる人々とすれ違いましたが、生きた人間のようには到底見えない。全身ほとんど裸の状態で、皆幽霊のように両手を前に出し、手や腰からボロをぶら下げてぞろぞろと歩いて小学校のほうへ避難していたのでした。ボロだと思ったものは、焼きただれた皮膚が手や腰からぶら下がっていたのでした。」

やっとのことで避難し、そこで初めて、自分もやけどをしていることに気付いた宏さん。後ろからの閃光で後頭部は水ぶくれになり、まるで頭が 2 つあるかのようだったと言います。腕にもやけどがありました。

「3、4 日するとただれ、膿みはじめ、ハエが卵を産んだらしく、首や後頭部からウジ虫が動き出しました。その痛いこと、筆舌に表せない痛さでした。右耳のただれた皮膚が当たり、ぼろぼろ落ちて骨だけになりました。」

公の場で講話をするのは、これが初めてだという宏さん。話をしようと思ったきっかけ

は、何だったのだろうか。
「先日 70 年ぶりに被爆した場所に行ってみました。バイパス道路ができていて、あれほど鮮明な記憶だったのに場所の特定ができませんでした。このことがきっかけで、トラウマになった被爆体験を今話しておかないと、全て消えてしまうと思い発表することにしました。」
　だが、70 年以上が経っても、当時通っていた小学校を訪れることはできなかった。
「(小学校の校庭に) 大きな穴が 5 つも 6 つも掘ってあり、遺体と薪を積み上げて焼いていました。白い煙が漂い、吐き気をもよおすあの臭い。来る日も来る日も町中から臭っていました。」
　何度も夢に出てきたという、この光景。思い出したくないし、この出来事を彷彿させる小学校には行きたくないという。

■山本和子さん（2 歳の時に広島で被爆）
　今年 1 月に闘病の末、逝去された和子さんに代わり、夫・宏さんが被爆体験を伝えてくださった。
　和子さんが被爆したのは 2 歳 6 カ月の時。自宅の窓ガラスが突き刺さり、家族が血まみれになった記憶がかすかにあった。この時、和子さんにもガラスの破片が刺さっていた。何十年も経ってから皮膚の下に潜んでいたことが分かり、非常に驚いたという。
　原爆投下の翌日には、叔母たちの安否を心配した両親と、叔母の嫁ぎ先であった堀川町に向かう。爆心地近くを通ったその道程は、幼い和子さんに強烈な印象を刻んだようで、「まるで地獄絵そのものだった」と話していたそうだ。
　和子さんの自宅近くには小学校があり、多くの遺体を火葬していた。この火葬する臭いは、自宅にも染みつき、何年経ってもなかなか消えることはなかった。
　宏さんと和子さんが結婚された後、2003 年、和子さんに最初の癌が見つかる。数年して再発し、原爆症の認定を受ける。その後も、数年ごとに再発、繰り返した手術は 5 回に及んだ。何度も前向きに治療を続けた和子さんだったが、2017 年 1 月ご逝去。
　原爆投下時の様子を語り始めた山本さんは、「ピカッとー」という言葉を発した後、言葉を詰まらせた。「その当時のことを思い出してしまい、話せなくなってしまった」と講話を終えた宏さんはおっしゃっていた。和子さんも「何年経っても鳥肌が立つ」と、生前、被爆体験を語ることはほとんどなかったそうだ。72 年の歳月が経ってもなお、被爆者の心には癒えぬ傷があることを痛感した。そして、その傷をおして被爆体験を伝えてくださることに、強い平和への想いを感じた。この想いをいかに受け止め、次の世代につないでいくか。被爆者、そして非被爆者である私たちとで、共に考えていきたい。

7. 若い世代より
　江戸川区内の中学生・高校生による平和に関する作文の発表
8. 献花

滝野公園へ場所を移し、江戸川原爆犠牲者追悼碑へ献花を行った。

今から 36 年前の 1981 年、3 つのお寺の住職、そして親江会の会員たちが中心となり、思想・信条・政党・宗派を越えて平和の誓いができる追悼碑を建立しようと考えた。この輪は、区内の被爆者はもちろん、宗教関係者、教育関係者へと広がっていく。一般市民からの協力も厚く、数千人から寄せられた募金は 442 万円にものぼったそうだ。同年 7 月、当時の江戸川区長・中里喜一氏の尽力もあり、江戸川区立滝野公園に追悼碑が建立される。たくさんの人々の想いが集まって生まれた碑だった。

追悼碑に刻んである絵は『原爆の図』で知られる丸木位里・俊夫妻が下絵を描いたものだ。40 日をかけ、子供から大人まで多数の参加者がひとノミずつ彫っていった。

また、追悼碑のまわりには広島・長崎両市から寄贈された「原爆瓦の碑」があったり、広島市の「クスノキ」、長崎の「ナンキンハゼ」が植えられていたりと、被爆地とのつながりを強く感じられる場ともなっている。

献花後、親江会の会長 奥田豊治さんにお話を伺った。奥田さんは、江戸川区ではもちろん、都内外でも精力的に活動を続けてこられた。数年前からお付き合いがあるが、60 歳下の私が負けてしまうのではと思うほど、エネルギーに溢れたお方だ。私たち次世代の活動を見守り、応援してくださっている。

Q. 37 回目の追悼式だが、活動を継続する上での原動力は？

追悼碑や追悼式を作り上げてきた人々の想い。はじめは 3 人の住職さんから始まり、それが被爆者へと、またそれ以外の人々へとつながっていった。こうした大勢の人たちとのつながりに支えられて、活動をやってきました。

Q. 次の世代へのメッセージ

広島・長崎に直接行ってみてほしい。そこでしか、感じられないことがあると思う。

そして何より、原爆や核兵器について「自分のこととして」考えてみてほしい。自分の家族が、子供が、孫がこんな目にあったらどうだろうか。

日本は今「核の傘」の下にいるが、この状況を変えていくのも１人１人の意識の問題です。例えば、選挙での自分の１票が日本の将来を変えるかもしれない。そんな自覚を持ってもらいたいと思います。

都内の追悼式に参加したのはこれが初めてだったが、参加者の多さ、そして世代の幅広さに驚いた。被爆者はもちろん、江戸川区長や区議、中学生や高校生が集って、自身の想いを語り、平和について考える。そのような場が、東京にもあること。これは、その地で活動を継続してこられた被爆者の方々の、努力の賜物だと感じた。

「原爆」というと「広島」「長崎」に結び付きがちだが、被爆者の組織・団体は各地にあり、それぞれに活動を続けられている。その一方で、高齢化に伴う解散を耳にすることも年々増えてきた。被爆者から次世代へ、直接想いを受け継げる場も、将来的に減っていくことは避けられない。そんな過渡期に差し掛かった今、各地の活動に被爆体験のない世代が足を運ぶことは、大きな意味を持つのではないだろうか。自分の住む街でもそのような場がないか、ぜひ目を向けてほしい。被爆者の方々の顔を見て、話を聞き、言葉を交わすことから「継承」は始められると思う。

中尾（継承活動に取り組む人々をつなぐＰＪ）

４．伝承者・沖西慶子さん　“人から人へ”継ぐ思い

私が沖西さんと出会ったのは、年初の長崎取材でのことだ。その際、同じ「伝承者」としてお話させて頂いたのだが、活動への姿勢、そして魅力的なお人柄に触れ、もっといろんなお話を聞きたいと強く思っていた。今回、平和記念式典に合わせ広島へ取材に行くことが決まり、その機会を持つことが叶った。

沖西さんは、お母様が長崎の被爆者である被爆二世。2013 年から広島、2016 年から長崎の育成講座を受講され、現在両県の伝承者として活動される唯一の方だ。継承活動を始めたきっかけから今後への想いまで、１つ１つの質問に、丁寧にお答え頂いた。

■継承活動に関心を持ったきっかけ

小学5年生まで長崎で過ごし、平和教育も受けてきたが「原爆＝怖いもの」という意識が強く、避けて生きてきました。なので、被爆二世ということを意識することもあまりありませんでした。

2008年に甲状腺の病気が見つかり「家族を呼んでください」ということになりました。母と共に主治医の元に行き、診断を聞いたあと、母が「私が被爆者だから、この病気になったんですか」と質問しました。私は「そんな昔の話を今持ち出して…」と思っていたのに、主治医からは「絶対とは言えませんが、その可能性は高いです」という返事で。そんな答えが来るとは思ってもいなかったのでショックだったし、母も同じようにすごく気落ちしていました。そんな母に「（沖西さんの病気は）被爆の影響じゃなかった」と伝えるために、まずは自分が放射線の影響について学ぼうと、広島大学で行われていた公開講座を受けることにしたのです。そこで、原爆の放射線が被爆者に与えた影響の大きさを知りました。この出来事をきっかけに、自分が「被爆二世である」ということを強く意識するようになりました。

■伝承者に応募した理由

たまたま置いてあった伝承者募集の案内を見て「放射線については学んでいるけれど、原爆についてはきちんと知らないな」と思って。また、入院中に吉田（敬三）さんという、被爆二世を撮り続けているカメラマンについて、テレビのドキュメンタリーで知ったのも大きかったです。吉田さんが番組の中で「被爆二世に（被写体になってほしいと）依頼しても、10人中9人は断る」と仰っていたのです。被爆二世ということが分かると、差別を受けるかもしれないからと。私はこれまで長崎・広島と暮らし、差別を受けたことはありませんでした。被爆二世であることを明かすことに問題のない私が、被爆者の体験を語り継いでいかなければならないのではないかと。

伝承者講座に行くようになって、被爆体験は「百人百様」ということを実感し、母の体験も形にして残したほうが良いと思うようになりました。証言の登録をすすめ、そこで初めて母の体験をきちんと聞くことができました。

■伝承者として証言する上で大切にしていること

伝承を始めた時に1番に思ったのは「変えないこと」。事実を正確に、装飾をしないこと。（被爆体験の）そのままを残したいという気持ちがあるので、あえて自分の意見はほとんど入れていません。淡々と時系列に並べています。体験した方の話がそのまま残っていくのが、1番いいのではないかと思っています。講和の中で用いる言葉も、被爆者の方のご希望を尊重しています。

また、伝承者は“通訳”のようなものじゃないかと思っています。被爆者と体験をしていない人々との間に、少なからずギャップがあるのは事実です。そのギャップを、言葉を用いて埋めていくことで、被爆体験や被爆者の想いを正確に伝えていく。そんな“橋渡し”の役割が果たせるようにと思っています。

■“非被爆者”が話すということについて

「非被爆者だから」と自分を卑下することは全くないと思っています。被爆者の話を聞き「正確に伝えていこう」という思いや意識があれば、（当事者じゃないと）語ってはいけ

ない、語れないということはないと思います。幸いにも、今、私たちは被爆者の方々と直接話して、確認を取ることができます。了承を得て作り上げた講話であれば「自分が話していいのか」などと思う必要はないと考えています。被爆体験を伝承される方には、自信と責任を持って話をして頂きたいと思っています。

■これからの活動について

広島と長崎とで、一緒に何かやれないかと強く思っています。被爆者の方が少なくなってくる中で、自ずと被爆体験を聴く機会も少なくなってきます。少しずつ進んでいく風化を食い止めていくために、

体験を聞く機会は１回でも多いほうがいい。広島・長崎が、２つの被爆地として共に協力しあい、大きな力となって講話などの頻度を増やせば、より多くの人の耳に届きやすいはずです。連携して、影響力や発信力を高めていけたらと思います。

■読者へのメッセージ

例えば８月６日、８月９日というように、限られた時だけでも構わないので、自分のルーツについて考えてみてほしいと思います。戦争は日本の歴史の一部であり、自分のルーツとなる人たちに大小はあれ、何らかの影響を与えているはずなのです。それに気付くと、今まで遠かった戦争が、そして戦争がもたらした原爆投下という出来事が、自分のルーツと重なり、身近に感じることが出来ると思います。原爆は「特別な体験」ですが、それを日常的に聴いたり、知ったり出来る機会が増えていくことを願っています。

継承活動に取り組む“非被爆者”の方に話を聞く時はいつも「経験していないことを話すことについて、どう思いますか」という質問をしている。私も東京で伝承者として活動しているが、いまだに「自身の立ち位置」について悩むことが多いからだ。「被爆者にしか話せるものではない」「伝承者を育成するより、被爆者の講話を動画に残すほうがよい」そんな声も度々耳にする。

では、なぜ「人から人」への伝承が行われているのか。今回沖西さんと話をする中で、伝承者育成の過程で発生する、被爆者と非被爆者の共同作業に大きな意味があるのではないかと思った。沖西さんの言葉を借りれば、非被爆者が被爆者の「通訳（伝承者）」となるまでに、何度も何度も聞き取りを行う。「正確に伝えよう」「ニュアンスまで汲み取ろう」「一番伝えたいことは何だろう」そんな想いを抱きながら、被爆者と共に講話を作り上げる。その中で、体験だけでない、被爆者の人と成りも知っていく。この過程を踏んで語られる伝承者の講話には、手記や動画だけでは伝えきれない被爆者の姿があるのではないかと思った。

被爆者の高齢化に伴い、上記したような共同作業が減少する、できなくなることは避けられない。だからこそ、これから伝承者として活動する傍ら、被爆者の方々の話を聞く、意見を交わす、そんな機会を多く持っていきたいと思う。

中尾（継承活動に取り組む人々をつなぐ PJ）

５．2017.8「証言のつどい」を取材して ～生の言葉で知る“原爆”～

平和記念式典が執り行われた 2017 年 8 月 6 日、「原爆被害者 8・6 証言のつどい」に参加した。このつどいは、被爆者の医療福祉相談を受ける目的で、ソーシャルワーカーを中心に発足した「原爆被害者相談員の会」が主催し、今年で 36 回目を迎える。

まず、少人数のグループに分かれ、被爆者の証言を聞き交流する時間が設けられた。私は、吉本トミエさんのグループに参加。

吉本さんは 1945 年 8 月 6 日、爆心地から約 1.2km の地点にいた母親の胎内で被爆（翌年 2 月に誕生）。生まれつき病弱で、右足が不自由だった。「足の障害は原爆の影響によるものかもしれない」そう告げられたのは 20 歳の時だったと言う。足を痛め病院に行った時のこと、医師が障害と原爆の因果関係に触れた。その後、障害をもつ子と親が集まり結成された「きのこ会※1」の働きかけもあり、1967 年、吉本さんは「原爆小頭症※2」の認定を受ける。

障害のため、親戚からは距離を取られ、学校ではいじめられた。5 歳下の妹は、足をひきずる自分をかばい事故死した。妹を可愛がっていた母はショックからか、吉本さんが中学 2 年生の時に家を出た。こうした出来事の背景に原爆があったのだ。

「小頭症だと認めたくなかった。」

全てを捨て知らないところに行ってしまいたいと、認定から 2 カ月後、吉本さんは生活の拠点を大阪へと移した。

吉本さんがこうして証言を始めたのは、2015 年のこと。なぜ語るようになったのか。参加者に向けてこんな思いを話してくださった。

「戦争がなかったら違う人生があったのではないかと思うこともある。だけど（原爆を）受けたことに変わりはない。苦しいことや悩むこともあるけど、それに立ち向かっていかないとー」

吉本さんは、ご自身のことを「一番若い被爆者」とおっしゃっていた。「だからこそ（証言活動を）頑張っていかないと。」と。原爆は母親のお腹に宿る命にまで容赦なく襲いかかった。「生まれながらの被爆者」を生み、その人生に癒えない傷を残していた。今回の証言を振り返りながら、その言葉の重さを、今一度噛みしめている。

昨年 8 月に聞いたこのお話。今まで文字にできなかったのは、そのあまりの壮絶さに「たった 1 度聞いただけの私が書いていいのだろうか」という葛藤がずっとあったからだ。だ

が、吉本さんの「立ち向かう」という強い言葉に後押しされる形で、そして、私自身初めて知った

「原爆投下時には生まれていなかった命が、72 年の歳月を“被爆者”として生きてきた」
この事実を何らかの形で伝えることができればと思い、書き上げた。

2017 年「証言のつどい」には、10 数名の被爆者の方が参加された。身体の不調をおして、会場に来られた方も多かったそうだ。被爆者と私たちが一緒に過ごせる時間は、残念ながら限りがある。私自身、広島から帰ってきた直後、親しくしてもらっていた長崎の被爆者との別れを経験した。

今なお核兵器の存在する社会で生きる私たちが、「核が人間に何をもたらしたのか」その実相を、被爆者の生の言葉で知るという経験は、大きな意味があるのではないだろうか。知ったことを後世に継いでいくことも含め。限りある時間の中で、1 人でも多くの人にこの経験をしてもらいたい。自身のまわりでも「証言のつどい」のような場を設けていければ、と強く思った。

※1 きのこ会（原爆小頭症の被爆者と家族の会）：facebook
（https://www.facebook.com/kinokokai/）

※2 原爆小頭症：放射線の影響を受けやすいとされる胎児の時期に被爆したことで発症する、原爆後障害の 1 つ。“小頭症”の名のとおり頭囲が小さく、ほとんどの人が知能あるいは身体の障害をもつ。

中尾（継承活動に取り組む人々をつなぐＰＪ）

６．（東京）2018/1 国境を越え考える平和～なぜ、ヒバクシャを語り継ぐのか～

1 月 26 日、文京シビックホールで行われた講演会「なぜ、ヒバクシャを語り継ぐのか」に参加した。

【写真：向かって左から、サリバンさん、通訳のドワイヤーさん、川崎さん、山田さん】
（「若者に被爆体験を語り継ぐプロジェクト」提供）

このイベントはアメリカの平和活動家 キャサリン・サリバンさんを招き、開催された。サリバンさんは、NPO「Hibakusha Stories」のプログラム・ディレクターとして、原爆を「投下した」側であるアメリカ人でありながら、広島・長崎の被爆者を母国へ招待し、高校生ら約4万人に被爆体験を聞く場を提供してきた。彼女が所属するNPOは、先日ノーベル平和賞を受賞したNGO「核兵器廃絶国際キャンペーン（通称：ICAN）」の傘下団体。昨年7月の核兵器禁止条約の国連採択にあたり、各国代表らへの働きかけにも尽力してきた。

サリバンさんは講演の中で、「（核を）自分に近い個人的なこととして認識すること」の重要性について繰り返し話した。そしてそれを、アメリカでの活動の“ゴール”と掲げている。被爆体験（Hibakusha Stories）は、軍事的抑止論という視点から、「核によって何がもたらされるのか」という人道的な視点にシフトさせる役割を果たし、学生たちに“観念”を疑うという行為をもたらしたと言う。

今回の講演でサリバンさんは「核の傘」の神話性、核攻撃を想定した訓練の矛盾など、緊迫する世界情勢を取り上げた。ベアリング玉を使ったデモンストレーションでは、響き続ける玉の落下音に、聴衆は現存する核弾頭の火力総量を体感することができた。また、ICAN国際運営委員／ピースボート共同代表の川崎哲さんは、核禁止条約採択後の署名・批准の状況などを解説した。私には、こうして自分たちの置かれている現状について問題提起していくことは、核が無関係なことではないと認識するための1つのアプローチだと感じられた。

またこの日は、長年活動を共にしている、東京被団協副会長の山田玲子さんも登壇した。サリバンさんは山田さんを紹介する際、こう話した。
「玲子さんをはじめ、被爆者の方々は、想像力を使う必要がありません。被爆者の方々にとって、核兵器の問題は他人事、抽象的な事ではないのです。被爆者の方々が、被爆体験を何度も何度も話すということは、非常に辛いこと、そういう認識を持っていただきたいと思います。」

原爆を知らない私たちは、こうした姿勢で被爆者と向き合うことを忘れてはならないと思う。

山田さんは11歳の時、広島の己斐町（爆心地より2.2km～2.7km）・己斐国民学校で被爆。8月6日午前8時、疎開前に校長先生の話を聞くために登校、友達と校庭に集まっていた。夏の暑さのためか、食糧難のためか、何人かの子供たちは気分が悪くなって倒れてしまった。校長先生から「少し休むように」と言われ、砂場で友達数人と座っていた時だった。校庭の中央に残っていた男の子たちが「B29だ！」と空を指差した。見上げると、高い青空に、銀色にきらきらと光るB29がUターンをするところだった。飛行機雲が弧を描き「きれいだな」と思った次の瞬間、何も見えなくなった。広島に原爆が投下されたのだ。

通っていた学校の校庭では、約2300人が荼毘に付されたそうだ。山田さんは「あの死に方は人間の死に方ではありません。そしてあの葬られ方も、人間としての死に方ではな

かったと思います。広島の慰霊碑には『安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませんから』と書いてありますが、あの時亡くなった人たちが安らかに眠ってらっしゃるとは思えません。」と当時を振り返った。

「戦争や原爆で亡くなった人たちが、安らかに眠れるように。核兵器によってどんなことが起きたのか、今生きている人たちに学んで、記憶して、そして伝えてほしいと思います。核兵器がなくなる日まで、決してあきらめずに伝えてください。私たちと共に、一緒に活動してください。」

山田さんはそう強く訴えた。

サリバンさんが繰り返し伝えた「核を個人的なこととして認識すること」。

この難しさは何もアメリカに限ったことではない。日本でも同様のことが言えると思う。戦争・被爆体験のあまりの凄惨さに、フィクションを聞いているような気になる、という声を耳にすることがある。72 年という歳月を経て「歴史の教科書に載っている昔話」と認識している人も、少なくないだろう。この認識を変えるのが、アメリカの学生たちの“当たり前”を揺さぶった「Hibakusha Stories」だと思う。被爆者との対話は、様々な気付きをもたらす。私も、これまで被爆者の方々と接する中で、「“被爆者”は決して特別な人ではない」、「普通の生活を送る人々が被害者となった」という思いを強くするようになった。被爆者と自分との共通項に気付くと、原爆は遠い昔の話ではなくなるのではないか。そして、世界の現状も違って見えてくるかもしれない。

核に対する認識が変わること、これが、今ある当たり前の日常を守る転換点になるのではないかと思う。

中尾（継承活動に取り組む人々をつなぐＰＪ）

７．（東京）2018/5　家族写真が伝える“平和” ～カメラマン・堂畝紘子さんに聞く～

5 月 3 日、写真展「生きて、繋いで ―被爆三世の家族写真―」を開催中のカメラマン・堂畝紘子さんを訪ねた。

2015 年より、被爆三世とその家族を撮影し始めた堂畝さん。活動を始めたきっかけや、同世代への想いを伺った。

活動を始めたきっかけは？

広島で生まれ育ち、幼い頃から平和教育も受けてきたので「自分も何かしなくちゃ」という思いがずっとありました。自分も見て育った平和学習のアニメなどを作る仕事がしたいと上京しましたが、なかなか望む仕事ができずに断念。18 歳の時から趣味で続けていた写真を学ぶため、都内スタジオで人物撮影を学びました。

その後、カメラマンのアシスタントを経て、2011 年に帰郷。カメラマンとして独立しました。「自分にしかできないこと（写真）」で平和を伝えたいという思いはありましたが、どう表現していいのか、何を撮影したらいいのか、分からないまま数年を過ごしました。

原爆投下から 70 年を迎える頃、高校の同級生に相談しました。

すると「私を撮るのはどうか？」という言葉が返ってきました。聞くと彼女が留学していた時、「祖父が被爆者である」ことを伝えると、子供を遠ざけられてしまうという出来事があったそうです。これをきっかけに彼女は「“被爆三世”、“被爆者の孫”とは？」と、意識するようになったそうです。

「被爆三世である私を撮ることで、何か見えてこない？」友人の提案をきっかけに、こうしたテーマで写真を撮るようになりました。

撮影を始めて半年、7 組の家族を撮影しました。そこで気付いたのが「被爆三世である」という自覚はあっても、おじいちゃん・おばあちゃんがどういう体験をしたか知らない、という人がかなり多いということ。気軽に聞けることではないけれど、今聞いておかないと、次の世代に繋いでいけなくなる。撮影を“継承”のきっかけにすることが大事なのではと思うようになりました。

なるべく広い世代に集まってもらい、撮影の時間に被爆体験を聞いたり、平和について話したりしてもらいました。若い世代がいかに（戦争や原爆について）考えていなかったか痛感する一方で、最初は嫌々参加していた子から「考えが変わりました」という言葉が出てきて…（こうした活動が）何かのきっかけになるんだな、と実感することができました。

被爆地を出て初開催について

広島・長崎での開催時に県外から足を運んでくださる方もいました。そうした方々から「実は祖父が特攻隊で…」「黒塗りの教科書の話を聞いた」など、展示をきっかけにご家

族のお話が出てくることがありました。日本中のおじいちゃん・おばあちゃんが体験した戦争。戦時中の話を聞ける家庭は、全国にまだたくさんあると思います。

切り口は「被爆三世の家族写真」ですが、そこを戦争や平和について知る・考える入り口にしてもらいたいな、と。現地に行かないとわからないこともたくさんありますが、まずは“知る”そのきっかけの１つになればと、今回東京での開催に至りました。

今後の活動について

第三者が入ることで「初めて被爆体験を聞けた」というご家族もいるので、自分にお手伝いできるなら、（広島）県内外問わず撮影を続けていきたいと思っています。展示に関してもローカルな話題にとどまりたくはない。全国で、世界で考えていけるような企画にしたいと思っています。

“原爆を体験していない”世代への想い

私たちの世代は実体験として知らない分、戦時中の出来事を他人事だと思いやすい。修学旅行で訪れた広島・長崎で初めて聞いた被爆者の話を「我が事だと思え」というのは難しいかもしれません。でも「家族の話」は他人事ではない。おじいちゃん・おばあちゃんがどういう体験をして、お父さん・お母さんが生まれて、自分が生まれたか。まずは家族を知り、自分のルーツ知ることで、戦争や平和について考えていければいいよね、と思います。

堂畝さんの家族写真には、一枚一枚「孫（被爆三世）が聞いた祖父母の被爆体験」がキャプションとして添えられている。今ではカメラの前で笑顔を見せる“普通のおじいちゃん・おばあちゃん”が、どれほどの悲しみや苦しみを体験したのだろう。

また、中にはほとんど記載のないキャプションもある。“語れなかった”、“聞けなかった”ことも１つの事実なのだ。

「どうしても語れないおばあちゃんもいた。でも“語れなかった”姿を知っていることも大事だと思う」この堂畝さんの言葉を聞き、私も一歩踏み出せずにいた「自分の祖父母の被爆体験と向き合う」ことに取り組んでみようと思った。距離が近いからこそ、聞けることがあり、聞けないことがあると思うが、堂畝さんの言うように、まずは“知ろうとする”ことを大事にしようと思う。

家族写真が伝える、次世代への平和の想い。様々な世代の人に感じてほしいと思う。

中尾（継承活動に取り組む人々をつなぐＰＪ）

７．（仙台）2018/8　43 回目の「仙台平和七夕」～夏の風物詩の片隅で～

仙台 YMCA の会員だった油谷重雄（あぶらやしげお）さんが、会員学習の一環として広島原爆について学びの機会を得、深めていかなければと感じたのが 1973 年のことだった。その過程で広島への原爆投下の日が仙台七夕と同じ日であることに気がつき、「仙台七夕でアピールをすることが、仙台の人に原爆について知ってもらい、この出来事の風化を防ぐことにならないか」と千羽鶴の七夕の吹き流しの製作とアーケード街での展示を 1976 年から始めた。短い東北の夏を彩る仙台七夕は毎年８月６日から８日開催。2018 年はのべ 200 万人を超える人に眺めていただいたことになる。当初のメンバーは 20 人。鶴は 2000 羽だったが、今は 25.000 人もの方から鶴が寄せられ、毎年おおむね 100 万羽にもなる。吹き流しに使うのはもちろんだが、残りはレイにしてお祭りにそぞろ歩く人々にお配りしている。レイには「平和七夕」とそのブログのアドレス、そして油谷さんの連絡先を書いた短冊が結びつけられ、それを見た人からまた新たな問い合わせがくるという。

油谷さんはまた、若い世代へこの問題を知ってもらい、考えてもらいたいと、考えている。かつては小学校でクラス単位の鶴が寄せられていた。今は高校生が多く関わってくれる。仙台市内の 17 の高校から鶴が寄せられ、仙台の尚絅学院高校や、福島の会津の高校、東京東村山の高校、神戸の啓明学院など、ミッション系の学校を中心にボランティアで作成作業をしてくれる学校も少なくない。

秋の学園祭の時期には七夕展示の終わった吹き流しをお貸しし、仙台市内のみならず遠方の高校にも展示してもらっている。昨年からの試みとして、ボランティアに訪れた生徒さんに原爆の体験談を一緒に聞いてもらっている。

「核兵器廃絶の機運は高まっている」と油谷さんは感じている。しかし、同時に風化の恐れも強く感じている。沢山の人に支えられながらの活動に感謝を感じながら、伝えていくことに知恵を絞り、行動することを厭わない油谷さんたちが作

りだした仙台平和七夕は、今年 2018 年で 43 年目を迎える。

仙台平和七夕ブログ
https://blogs.yahoo.co.jp/ma7143942

仙台平和七夕 Facebook ページ
https://www.facebook.com/heiwatanabata/

・・・

８月６日は、仙台七夕の初日です。毎年アーケードでは華やかな飾りが風に揺れ、お祭りを楽しむ人が街に繰り出します。自分はどうしてもそれに違和感がありました。そんな日を、「伝えるための日」にした発想と、周囲を巻き込みながらそれを継続し、なおかつ若い世代への継承のツールにもしているということに驚きと軽い感動を覚えました。また、この仙台という土地で、この七夕に関わることで、核兵器廃絶、ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキの気持ちをささやかでも形にできることは私には願っても無いこと。高校生さんたちがこういったことに取りくんでいる姿を目の当たりにすることにも希望を感じました。継続の陰には、静かで丁寧な取り組みがあったことにも感銘を受け、今ここでできることを自分も、という気持ちが新たになりました。

よしだゆか@仙台（継承活動に取り組む人々をつなぐ PJ）

８．（東京）2018/9/18　「被爆の実相とデジタルアーカイブ体験会～新たな継承体験～」

デジタルの技術を駆使して、被爆者の記憶を後世に継承していく試みがある。

９月１８日、東京大学（東京都文京区）で行われた「被爆の実相とデジタルアーカイブ　新たな継承の体験」に参加した。これまで集められてきた被爆者の体験談や写真をウェブの地図上に掲載することでその記憶を可視化し、蓄積していく取り組みを体験することができた。

体験会には約 40 人が参加。1 グループ 8 人で、それぞれのグループが一人の被爆者を囲み体験談に耳を傾ける。そして、参加者が手持ちのスマートフォンを使い所定のウェブページに話の感想を書き込むと投稿が完了し、スクリーンに映し出された地図上にも反映された。私が参加したグループでは、その感想が次の会話の糸口となり、参加者と被爆者の交流がさらに弾んでいた。

体験会の進行をした渡邊英徳・東京大大学院教授は、「証言者と一緒にデジタルアーカイブを囲んで、肩を並べて双方的に談話できる場で記憶を受け継いでいくことができる」と説明する。地図上に被爆者の体験談が表示されるデジタルアーカイブによって、爆心地と被爆者の位置関係などが視覚化され、被爆者とイメージを共有しつつ、どこでどんな体験をしたのか、リアリティを持って話を聞くことができた。

交流に続いて、被爆者が持参した写真をカラー写真にする技術も体験した。渡邊研究室の研究員が、持ち寄られた写真をタブレットで撮影し専用ソフトで読み込むと、セピア色の写真はカラー写真となって表示された。持参された写真は被爆者の幼少期を写したものであるが、カラーにしてみると現代と変わらぬ趣だ。今を生きる私たちと何ら変わらぬ日常がそこにはあり、被爆者の存在を身近に感じられた。

今年で戦後７３年を迎えた。戦後生まれは８割を越えるとされている一方で、戦争経験世代は年々減っていく。戦争経験者本人の口から語られる言葉に耳を傾けることは、もちろん重要だ。しかし、それだけでなく、彼らから語られた体験談を後世に継承していく具体的な方法を考え実行していく必要がある。

そのヒントを、デジタルアーカイブの体験で垣間見た。現代の技術は、戦争体験の継承にも生かすことができると、身をもって感じた。今回のような、戦争経験者が語る記憶の質感をも後世に受け継ぐ技術の体験を入り口に、記憶継承の輪が広がっていけばと思う。

田村　葉＠埼玉（継承活動に取り組む人々をつなぐ PJ）